

[新資材を活用した環境や人にやさしい野菜生産技術の開発]
急増するミズナ栽培に有効なトンネル資材と品種の選定

小寺孝治・澁澤英城・田邊範子・沼尻勝人・宇津木栄司*
(園芸部・*中央普及センター)

【要 約】ミズナの減農薬・周年安定生産技術を目指すうえで、高温期の栽培で有効となるトンネル被覆資材や品種などについて検討した。その結果、生育と防虫面から資材にはサンサンネット GN2300, SL3200, ベルネット, パワロンが有効であり、品種では‘みずみずしい菜, 京みぞれ, 早生はりはり, はかた千緑, MG-605’などが有望である。

【目 的】

最近、都内では新品目であるミズナの生産が急増しており、作付面積は 16ha 以上に及んでいる。ミズナはサラダ感覚で食べられることから周年需要が高く、安定した減農薬・周年生産技術が求められている。本報では虫害や軟弱徒長で問題になりやすい高温期の安定生産を目指すうえで有効となるトンネル被覆資材や品種などについて検討する。

【方 法】

試験は当場内の黒ボク土圃場を用い、6月から9月まきの作型で4回行った。いずれも施肥は化成肥料を用い、成分量でN, P₂O₅, K₂Oを各 1.0 kg/a ずつ施用した。床幅は約 70cm, 5条(条間 12cm)栽培を原則とし、株間は作期により変更した。各試験の播種期, 株間, 被覆期間, 収穫日については各図に示した。また播種(定植)時にはフォースとモスピラン粒剤を施用し、直ちに各種被覆資材により密閉被覆した。トンネル資材は新規に7月まきで使用した資材を8月, 9月とも再使用した。播種は6月まきのみ 200 穴セルレイを用いたが、定植労力が多大なことからその後はクリンシーダ(播種機)を用いた。

【成果の概要】

- 1) 6月まき：べたがけとトンネルによる比較試験において、7月31日の調査はやや若どり収穫を行ったが、生育はいずれの品種もトンネル区の生育が優れた(図1)。ミズナは品種によって葉数型(①～⑦)と葉重型(⑧～⑩)に大別できるが、現状では細葉・細軸の葉数型品種が好まれている(図2)。また草丈には品種間差がみられ、高温期の栽培で草丈を低く抑えたい時には④MG-605が有望であるが、葉数や株重も確保できる品種としては‘②みずみずしい菜, ③京みぞれ, ⑤早生はりはり, ⑥はかた千緑’などの品種が有望であった(図2)。
- 2) 7月まき：図3には6cmと12cm株間で7種類のトンネル資材を被覆した時の生育を示した。株間が広いほど株重や葉数は高くなったが、草丈や葉色では同等またはやや低下した。ただしGN2000の株重は株間による影響が小さかった。これは透光率や通気性が高いためと考えられる。虫害はキスジノミハムシによる被害が多く、特にGN2000区が高かった。
- 3) 8・9月まき：草丈が40cmを超えた時期に一斉調査を行ったが、葉数は8月まきで少なくなった。株重は資材と作期によって異なり、8月まきでは高温による株重低下、9月まきは保温力の差と考えられる。虫害は7月まきと同様の結果が得られた(図4)。
- 4) 以上、生育と防虫面から資材にはGN2300, SL3200, ベルネット, パワロンが有効であり、品種は‘みずみずしい菜, 京みぞれ, 早生はりはり, はかた千緑’などが有望である。

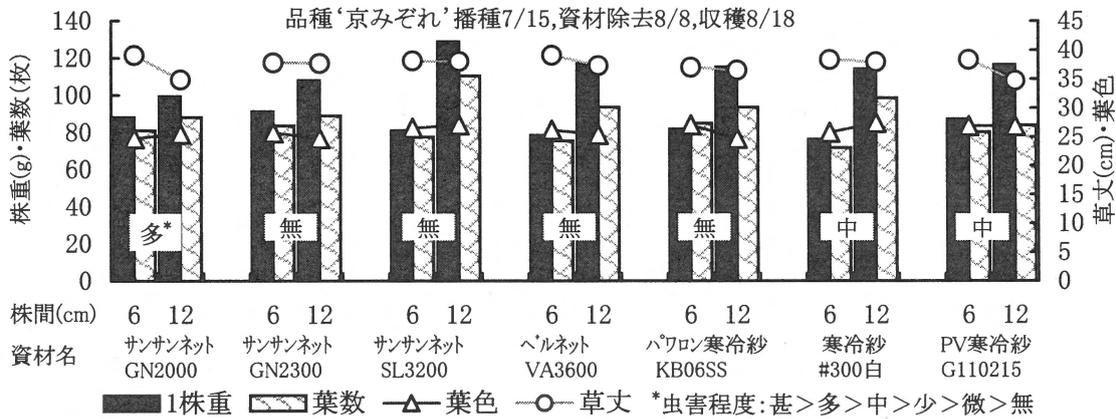
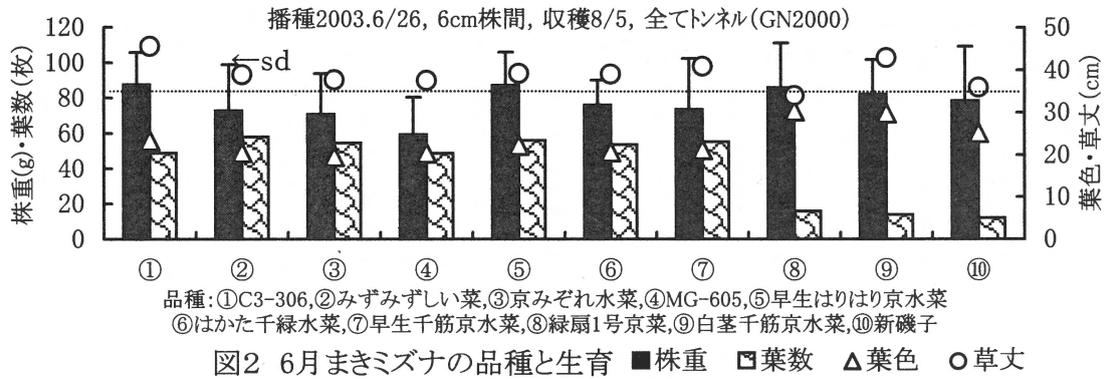
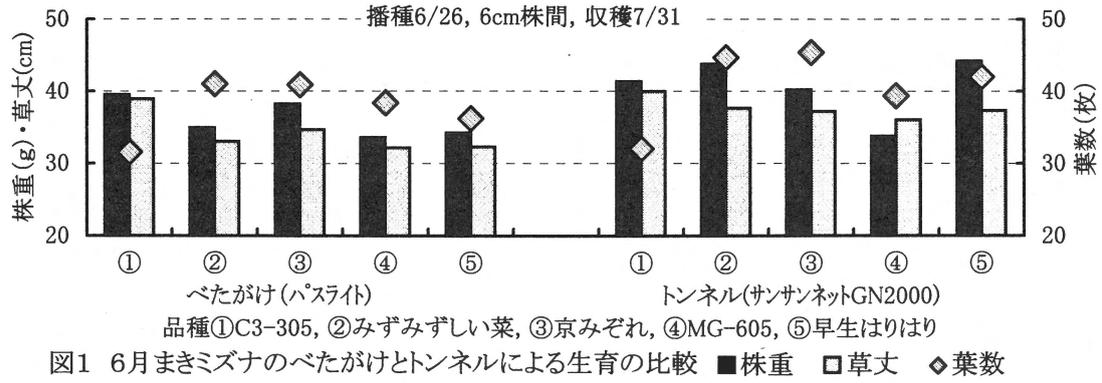


図3 7月まきミズナのトンネル被覆資材および株間が生育に及ぼす影響

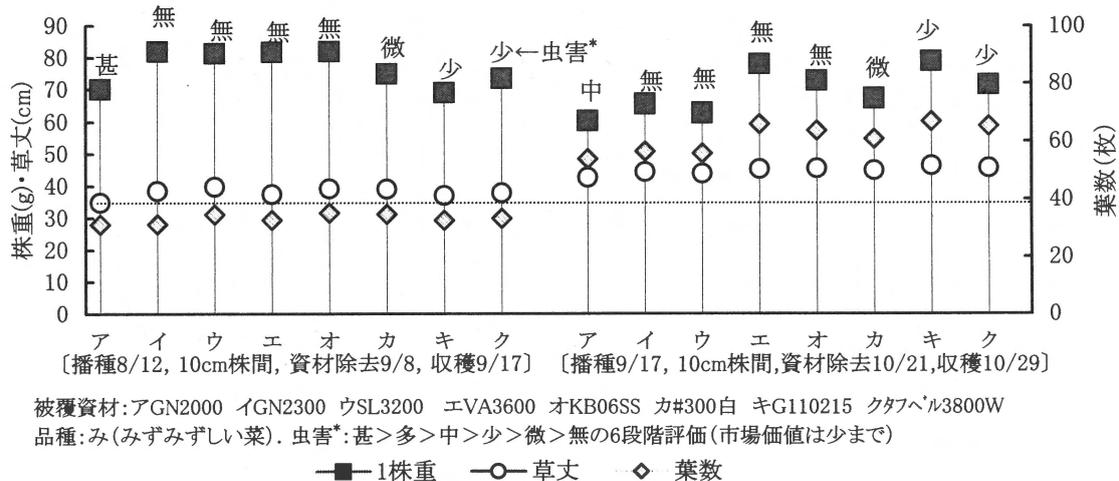


図4 8月, 9月まきミズナのトンネル被覆資材が生育に及ぼす影響